

9月例会報告

【日時・会場】2002年9月24日(火) 19:15～ 筑波大学附属高校会議室→ ～2:00 カリンカ

【参加者(会員)】荒井義行(毎日新聞) 内田正人(B&D) 宇都宮徹壺(写真家) 川前真一(日本医療データセンター) 澤井和彦(東京大学) 内藤隆(横河F C) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中村敬(ACクレッションザーゴコーチ) 橋本潤子(フリーライター) 浜村真也(大人のためのサッカー教室) 松岡耕自(立命館大学) 吉池淳(CCC(株))

【参加者(未会員)】谷悠己(東京外国語大学サッカー部)

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

フットサル・プロジェクトII実施上の問題点

澤井和彦(東京大学)

9月の月例会では、「フットサルプロジェクト2」について、その概要とプロジェクト実行上の問題点について話し合いがもたれた。発表者はプロジェクト責任者の澤井和彦氏。

<目次>

<1>澤井氏プレゼンテーション

1. フットサルの特徴
2. プロジェクトの背景
3. 調査テーマ(案)
4. 調査の方法(案)
5. フットサルプロジェクト遂行上の問題点

<2>ディスカッション

1. プロジェクト1の成果
2. プロジェクト2の目的
3. 調査費用について
4. フットサルとテニス
5. プロジェクトのあて先
6. 浜村プロジェクト?

<感想・意見(中塚義実)>

<1>澤井氏プレゼンテーション

1. フットサルの特徴

- サッカー未経験者、学校運動部活動未経験者、女性等、既存のスポーツと異なる参与構造
- ・競技志向よりもコミュニケーション、レクリエーション、レジャー、ファッション志向
 - ・学校、企業、地域といった既存のネットワークの影響が少ないボーダレスで流動的な人間関係
 - ・IT活用度が高い
 - ・都市（関東、関西）において普及・発展
 - ・施設は民間が中心
 - ・既存の競技団体より民間のイベント運営会社の活動が活発

2. プロジェクトの背景

- ・学校スポーツ、企業スポーツ、地域スポーツ、レクリエーション・スポーツ、健康スポーツなどとは異なる文脈
- ・「フットサルプロジェクト 2」では、協会や連盟といった「公的組織」がフットサル参加者に対してどのようにアプローチし、またどのように振る舞うべきかということ、メンバーによるディスカッションによって探ってきたが、結果として既存の制度や組織とその理念の延長上ではカバーしきれないという不透明性、不確実性だけが残った。
- ・こうした不透明性にアプローチするために、「プロジェクト 2」ではフットサル参加の文脈や構造を、社会科学的に調査分析することを目的として行いたい。

3. 調査テーマ（案）

(1)フットサル参加の社会構造

フットサル参加者の属性、社会階層、ライフスタイル、サッカーないしスポーツ経験の影響、学校運動部活動経験の影響、女性の参加率、地域、IT への親和度、意識（動機・目的・きっかけ、スポーツに対する意識・イメージ、女性参加者の意識など）

(2)フットサルの参加構造

頻度、お金、場所、仲間、目的、きっかけ等

(3)フットサル普及・発展の社会的、制度的背景

協会の活動、フットサルの普及、インフラの普及、イベント運営会社の経営実態等

(4)都市社会学的アプローチなど

都市におけるスポーツ、フットサルの機能について社会学的に把握します。メインテーマではありませんが、あとで述べるように、うちの学生達が興味をもっているテーマです。

4. 調査の方法（案）

(1) アンケート調査

フットサル大会参加者、施設利用者へのアンケート調査を、参与観察、インタビュー調査など、多面的なアプローチを用いる。

サンプリングは無作為抽出による網羅的な調査が難しいので、フットサルとサッカーやその他のスポーツ実施者、あるいは都市と地方など対照的・理論的にサンプリングし、従来のスポーツ参与の構造と比較検討する

調査対象は、協会や民間主催のレクリエーションレベルのフットサル大会参加者、競技レベルのフットサル大会参加者、日本代表クラスの選手など。対照群として、協会や民間主催のレクリエーションレベル、競技レベルのサッカー大会参加者など。

方法は、基本的には質問紙を用いる。項目は上記に述べた通り。

(2) インタビュー調査

対象は協会関係者、スーパーリーグ関係者、民間企業関係者、トップレベルの選手など。内容はフットサル普及の戦略、理念、展望、これまでの経緯、選手の意識、生活等

5. フットサルプロジェクト遂行上の問題点

・以上のような調査をするとすると、金銭的、人的にコストがかかる。現在、澤井と川前の他1名がスタッフとして手を挙げているが、現実には3人ともフルタイムで動くことは不可能。調査費用もサロンの予算でカバーできるようなものではない。

・一つの考え方として、こうしたコストのかかる調査は、サロンのプロジェクトとしてはふさわしくないという考え方もある。二つ目は、外部の組織、たとえば大学の研究室、研究組織などと協力して行うという考え方もある。学生を人的資源として活用し、資金的には大学の研究費に依存することになるかもしれない。データの著作権はプロジェクトメンバーにのみ帰属する。成果物に「サロンの協力を得た」という明記する、成果物はサロン会員には無料もしくは格安で提供するなどが考えられる。

<2> ディスカッション

1. プロジェクト1の成果

(中塚) プロジェクト1は、日本フットサル連盟が全国組織となるにあたり、サロン2002にいるフットサル関係者でプロジェクトをつくり、望ましい連盟のあり方についての提言をする目的で、期限を設けて進められた。従来型の競技団体を作っても意味がない。フットサルの勢いを加速させるためには「クラブ」という概念を持ち込んで、連盟・協会への加盟単位をクラブとし、連盟がクラブを把握し、クラブが個人を把握する。母体となる組織は「クラブ」であり、「チーム」は競技会に参加するときに編成してエントリーすればよい。こういった連盟・競技団体イメージを提示した。

しかし、TFA（東京都サッカー協会）会長には「クラブ単位で加盟、チームは競技会へのエントリー段階で」ということがイメージしてもらえなかったようである。会長が示されたのは、「学連のように、リーグ戦をやっているならば、それがそのまま連盟になる」との考え方であり、それもまたもっともである。

プロジェクト1の成果が直接的に反映されることはなかったが、この検討過程を通して我々もイメージを整理することができたし、新しい競技団体のイメージを投げかけることはできた。

いま東京都フットサル連盟は、東京都フットサルリーグを母体に立ちあがろうとしている。

（澤井）会長のイメージは連盟＝クラブだと思う。サッカー協会の連盟がクラブをやることの問題は、このクラブ（＝サッカー協会）以外が著しくサッカーができなくなるということ。つまり、排他的、独占市場になってしまうこと。たとえば公共施設は、体協の公認団体が優先使用している。これはクラブには仲間以外入れないという意味で問題。しかも、そのクラブには強大な権限がある。それが私の問題意識でもある。

2. プロジェクト2の目的

（中塚）提言とまではいかななくても、現状はこうだということを知らせることに意義がある。現状とは、草の根フットサルからアスリートとしてやろうとしている人たちの生活実態まで含む。フットサル日本代表選手が、どういう経緯でここまできて、現在どのようにアスリートとしての生活を維持しているのかをインタビュー形式でやろう、という話がフットサルプロジェクト2の初期のころ出た。

（参加者）フットサルをやっている人の意識はほとんど把握できてない。単純に知りたいと思う。

（澤井）私にとっては学問的な関心、川前君的にはマーケティング的な関心ということになるが、連盟としてもどういう人たちがフットサルをやっているか、ということがわかればいろいろと便利なこともあるかと思う。従来のサッカー協会の考え方は、部とか企業とか組織として可視的なところにアクセスすればよかったが、フットサルの場合は、どういった人たちがやっているかが不透明なのが非常に重要で、どういう人たちの集まりなのか把握することが、連盟にとっても裾野を広げる上で必要ではないか。民間のイベントに参加している人たちはアクセスできるかもしれないが、そのニーズに連盟として応えなければ、わざわざ連盟に登録したり参加したりすることはないだろう。そのニーズに応えられなければ、今フットサルをやっている人がそのうち違う種目に行ってしまうかもしれない。したがって、そういったところを把握するのは、意義があると思う。

3. 調査費用について

（中塚）まず、そんなにお金がかかるのかな、というのがある。人件費を厳密にカウントすればかかるだろうが。例えば、いま仲澤氏（筑波大学）が中心になって進めているJリーグの観客調査は、サロンの前

身の「社・心グループ」の頃からやっていたが、みんなボランティアだった。その方がスムーズなんじゃないか。本当に必要なら賛助金という形でやるのがサロンとしてはいいと思う。「誰に」がもう少しはっきりしてくれば、お金だけじゃなくて労力の面でも協力してくれる人が出てくるのではないかな。

(参加者)「誰に」をはっきりさせておけばお金は自然についてくるだろう。「誰に」を考えると、そういった企業や財団に持っていくのが一番現実的だと思う。

4. フットサルとテニス

(参加者) 参考になるかわからないが、発想をもう少し柔軟にして、例えばフットサルに替わるスポーツって話があったが、テニスがそれだと思う。15年位前にすごく流行ってたが、けっこう大学のサークルがテニス場に行ってやっていた。それが、今やフットサル場が変わってきている。調査テーマを考えると、参加者の属性とかは、テニスで置き換えると違ったものが見えてくるかもしれない。

(参加者) テニス協会も、いかに競技人口を増やすかということを怠ってきたと、かなり反省しているという。なぜテニスが失敗したのか。フットサルもでてきて10年くらいになると思うが、フットサルに限定するのではなく、時系列という概念を入れてみると別のものが見えてきて、それと比較してみると興味魅かれる。

(澤井) 確かに大学でも運動部のような既存の団体よりもサークルの方が人数も多くて強い。既存団体から人口が流出しているという点でフットサルと似ている。うちの大学の場合、運動部はサークルを相手にしてこなかった。なぜ運動部に入らないのだと思っているうちに人数も減り弱体化してしまった。サークルを把握できず、運動部というのにこだわった結果そうなったのではないかなと思う。

5. プロジェクトのあて先

(参加者) プロジェクトをやる時にはまず、誰に、何を、どのように、が大事。「何を」「どのように」はいいが、「誰に」が欠けている。そこが見えてくればやり方もはっきりしてくると思う。プロジェクト I は、東京都サッカー連盟に提言するというのがはっきりしていた。今回もサロン 2002 のためなのか、東京都フットサル連盟のためなのか、フットサル場の経営者のためにやるのか、用具メーカーのためなのか、そういうのが決まると、お金の引き出し方とかも決まってくると思う。

(中塚) このプロジェクトで出てきた成果を、誰に、どこに反映させるのか。今聞いてて思ったのが、川淵キャプテンが J F A 登録人口を 80 万から 200 万にしているが、「それをどうやってやるのか？」というのがプロジェクトの落としどころにみえる。そういう最終的な落としどころを視野に入れて、じゃあどうということを調べたらいいのか、を考えた方がいいように思う。

(参加者) プロジェクトというのは、えいや！！っていうのが必要。単純に、面白がってくれる人がどれ

だけいるかということだと思う。僕はたまにしかフットサルをやらないが、研究をされている方はこれでいいと思うが、僕としてはプロジェクトとしてこれをやりたいとは思わない。仲間集めは、面白がってくれる人を募るということだと思うので、まずそこからプレゼンにつながると思う。あとは、実際にボランティアにせよ何にせよ、最終的にやってよかったと思える確信がないとやはり厳しい。まあ、一番大きいのは期限をどこに持っていくかというのが、モチベーションの意味でも重要。区切りっていうのは、動かす力としては大きい。

(澤井)僕は、こういった調査は非常に中性的に学術的にやる必要があると思うし、お金はなくても言われたが、どうせやるならきちんとやらないといけない。できることをやっていくという考え方もあると思うが、できれば網羅的にやっていく必要がある。そうすると一定のコストを見込む必要がある。そういう考えでデザインしたらこういう風になったということ。

今までの意見で非常に参考になったが、サロンのメーリングリストで投げかけて反応がなかったというのは、プロジェクトとしてはサロンの認知は受けなかったと考えた方が健全かと。魅力がないというのはその通りで、方針を見直さないといけないかなと。

僕はきちっとやらなくてはいけないと思ってこういうデザインにしたので、これ以外のやり方だとモチベーションされない。だから、このプロジェクトはいったん閉じて、サロンとは違ったところでふくらまして、違った形で考えたほうがいいかもしれない。ネットワークとしてサロンにまた持ってくることはあるかもしれないが、もしやるとすれば、やはり「誰に」が先にくることになると思う。こっちで作ってもいいのかもしれないが。

6. 浜村プロジェクト？

(参加者) キャプテンの 200 万人発言について、僕は結構冷めた目で見ている。ただ、今まで登録人数だとかいうことは日が当たってこなかった部分なので、その点では、あの発言で多少でも注目を受けたという、いいきっかけかもしれない。強化に対しては2年ごとに強化指針を改訂しているが、「普及指針」というのは協会としてはまだ出ていない。普及についても強化同様、世界のスタンダードがあると思うが、それを勉強しようとしていないのではないか。それを民間レベルで話すのはどうかと提案したい。

(中塚) 次につながるテーマも出たところで、「フットサルプロジェクト 2」と言っているものについてはいったん持ち帰ってもらって、サロンの中で再提案するか、別のところを母体にしてやるか、どちらにしてもここまで進んだものをなしにするのはもったいないので、何らかの形で進めて欲しいと思う。その中で発展して行って、プロジェクト 3 が生まれるのもいいだろう。あとは今日の話の中で、サロンとしてやってみる価値がありそうなものも出てきたので、「カリンカ」で続きをやりましょう。

<感想・意見 (中塚義実) >

「フットサル」の現状についての意見交換も面白かったが、「プロジェクト」とは何かについて改めて考える場となった。

サロンで最初のプロジェクトである「フットサルプロジェクト1」のときに整理した「プロジェクト立ち上げの手順」を手がかりに、いま一度考察してみたい。

<プロジェクト立ち上げの手順> (2000.10.2.)

- 1) 解決すべき課題の存在
- 2) その課題をサロンで（サロンの人材で）解決しようと考え、行動を開始する発起人の存在
- 3) 発起人によるプロジェクト概要の検討
- 4) 発起人から会員へ向けての、プロジェクト立ち上げの通知及びメンバーの募集
- 5) プロジェクトの活動開始
- 6) 何らかのアウトプット

サロンの公認プロジェクトであるためには、このプロセスのどこかの段階で役員会の承認が必要。

- 1) 解決すべき課題の存在

単なる個人研究や個人的な営利活動でなく、ある程度の公共性・社会性がないとサロンの公認プロジェクトにはなじまないだろう。"何を""何のために"行うのかを明確に。

- 2) その課題をサロンで（サロンの人材で）解決しようと考え、行動を開始する発起人の存在

- 3) 発起人によるプロジェクト概要の検討

- 4) 発起人から会員へ向けての、プロジェクト立ち上げの通知及びメンバーの募集

面白くてやりがいのあるプロジェクトの概要を発起人（複数）で検討してもらいたい。魅力的なプロジェクトであればメンバーは集まってくる。内輪で進めるのではなく、会員全体にしっかりPRして、プロジェクトメンバーを募集・確定してもらいたい。"誰が"中心になって進めるのか、プロジェクトリーダーと事務局担当者は決めておく必要があるだろう。ナーナーではいけない。

サロンの豊富な人材（「会員名簿」参照）を活かせば、いろんな分野においてプロジェクト設置が可能である。会員は誰でも発起人になることができるので、積極的に動き出してもらいたい。

- 5) プロジェクトの活動開始

期間を限定することが大切。ただやらせていてもだめ。そのためには、ある一定期間内に成果を出せるような具体的な「課題」を設定する必要がある。継続して取り組みたい場合は、プロジェクト2、3という形で新たにメンバーを募集して進めていけばよい。

6) 何らかのアウトプット

"誰に"働きかけるのか、プロジェクトの成果はどのように活用されるのかを、はじめに考えておく必要がある。これが明確でないと、モチベーションも高まらない。

「サポーターズプロジェクト 2002」が非公認プロジェクトとなるなど、プロジェクトの位置付けにはいまだにあいまいな部分が残る。けど、「やってみる」ことが大切なのであって、たとえ「非公認プロジェクト」になったとしても、そこでつながったネットワークは続いていくし、活動が始まることに意義があるのである。

すでにいくつか、新プロジェクト立ち上げの兆しもあるようです。楽しみにしています。

以上